
気まぐれ勇者の召喚士

東上尊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気まぐれ勇者の召喚士

【Nコード】

N3070W

【作者名】

東上尊

【あらすじ】

俺小説です。ある日彼はチンピラから女の子を守るため己の正義を振りかざしそして逆に殺されてしまいました。そして気がつくと神の住まう天界、そこで神が偶然創りだした召喚獣を召喚できる力が手に入る液体、それを彼に飲ませたのだ。そして彼は神様に異世界を救うように命令されるのだ。異世界を救えば何やら天空軍と呼ばれる天界の部隊に入れるらしい、しかし彼はそんな事望んではない。しかし彼は容赦なく異世界へ送られ、そしてそこで

「勇者として世界を救う旅をするのだった。」

2011/10/31から更新始めます・・・

プロローグ

人の人生は長いように思えて砂時計の砂のようにあっさり時は過ぎ去っていく。

ほんの数日、数週間つといた時の流れに思えたその瞬間は50年や60年といつの間にか過ぎ去り

老人になっていた、なんてことはよくあることだ。だからこそ若い頃に旅をしたいと

一人旅に出かけたりバカをするのだ。

短い人生をよりよいモノにするためにその一瞬一瞬を大切にするために。

だが、俺の人生は人のそれよりも短く蝋燭の火が風に揺られ消えるようにあっさりとして

消えた。あの時チンピラなんかに関わるんじゃないかった。

あの時見て見ぬふりをしていればよかった。

そんな事ばかりを暗闇の中でずっと思っていた。

だがあの時は俺の正義が奴らを許さなかった。

俺の心が奴らを止めると叫んでいた。

だから俺は行動したんだ。

ドジでマヌケで喧嘩も誰よりも弱いそんな俺が一人の女を守るために

拳を振り上げた。いくどもなく殴られては殴り返す、そんな繰り返

返し

そして光物を俺は見た、男たちの一人がナイフを取り出したのが見えたんだ。

恐怖に一瞬体が震えるのを感じたが、それでも俺は奴らに決死の覚悟で殴りかかった

その後の事は覚えていない。ただ覚えていることは痛かった。

冷たく鋭利な物が腹に直接触れてそのまま俺は倒れた。

そのまま視界が暗くなつていくのを感じながら俺は意識を失った。その後はずっとこの暗闇の中にいる。

光も何もないただの暗闇、誰一人見えない孤独の空間。

これが死、これが死ぬということ、まだ16年しか生きていないまだやりたいことも見たい漫画も何一つやり終えていない。

こんな死に方は嫌だ、俺はまだやりたいことがたくさんあるんだ。街のチンピラに刺されてそれでおしまいつてそんなの酷すぎる。

正義って何だよ！ 死んじまったら意味がねえーてか正義語つて死ぬとか

ただのバカじゃん、クソ！クソ！クソ！俺のバカ！なんであの時助けになんて行つたんだよ！ あの時行かなければ俺は今も生きて街を歩いてたんだ。漫画だってコンビニで立ち読みだってできてた

なのに、なのになんで俺はあの時……

暗闇の中叫ぶようにしてそんなことをつぶやいた。

すると突然視界が眩いばかりの光に包まれ、次の瞬間。

視界は雲を映し出した。

それは空に広がる綿菓子のようなふんわりとした雲、左右にはギリシヤにありそうな

年季の入ったアンティークの石像、どこからどう見ても異様な空間。

そんな場所に俺は立っていた。それも大きな人の座り込む椅子の前に

俺は立っていた。その存在は高らかに声を上げ笑いながらこう言った。

「ホッホッホ、メリークリスマス」

その言葉に一瞬唖然とするが、すかさず突っ込んだ。

「いやいや、今は夏、真夏だ！ クリスマスの季節じゃないからね？

てかあんた誰？ もしかしてここって天国か何か？ 明らかに普通じゃない」

「そうか……まだクリスマスじゃないのか……残念
まあーそんなことはどうでもいいか。まずはじめにわたしは神様じゃ
それとここは天界、そこにおけるザビエルはここへ転生しわたしの秘
書をしておる」

聞いてないことを次々とを口にするなあーこの人は、てか神様？
神様ってこんなバカそうな人でいいのか？ 俺の想像してた神様は
槍持ってて海割って雷降らすそんなのイメージしてたんだけどな
あー

「お前のイメージしたのはオリンポスのやつの事じゃろう。あんな
出来の悪い神と一緒にするでない、わたしは最高位の神エルシオン
だ。

どうじゃ？ わしの偉大さがわかったか？」

「なんで俺の思ったことがわかるんだよ？ それも神様の力ってや
つか？

てか最高位の神様って突然言われても全然偉大に思えねえーよ
全く情報の伝わらない村で都会から突然やってきた総理が俺はえ
らい人なんだぞ？

なんてことを突然言っても誰も信用しないだろ？それと同じだ、
てかさっきのクリスマスのネタとか口調とか全然偉大さを感じさ
せないんだよな

てかなんで俺はこんな場所にいるわけ？ 俺は死んだんだろ？そ
れなら

おとなしく天国に送ってくれよ」

長く伸びた白ひげとたるんだまぶたがわずかに揺れた瞬間、顎に
手を当て

老人は声を上げた。

「まあー聞け、ついこの前ワシは世界に一つとないある物を創りだ
したのじゃ

まあー作ったというよりは偶然できてしもうたっと言うべきか、
それは

血液、ただの血液ではない、それは瓶一杯分の量がありそれをすべてのみほすと

召喚術が扱えるようになる」

「召喚術？ それってゲームとかよくある魔物とかを召喚する能力の事？」

「そのとおりじゃ、じゃが、ゲームとは違ってこの力は

あらゆる世界から魔物を呼び出すことができる」

「へえーで？なんでそんな話しを俺にするわけ？」

老人は不敵な笑みを浮かべ素早く大きな指先で俺を指さすと、

「お前にそれを飲んでもらう。そしてこの世界とは違うほかな世界そこで世界をひとつ救ってもらいたい。世界を救えばお前に良い事が起こるぞ？」

それはズバリ天空軍の部隊員になれる資格じゃ、どうじゃ？いい話じゃろ？」

「……意味不明なんですけど。力の事はわかったけど天空軍って何？中二病ですか？マジで意味不明なんだけど」

「まあーそのことはお前が行く世界を救った後でしょう。さて

ザビエル、殺れ」

「え？」

その瞬間、視界に頭の輝く教科書などよく目撃するあの方が現れ俺の口に何かを突き刺すと、ニヤリっと笑いそして喉に生ぬるい血なまぐさい

液体が抜けるのを感じた。

そして続いて目の前に座る神がうれしそうに微笑むと、

「よし飲んだな？ さて、続いて能力の事について話そう。まずはじめに

召喚する時は地面にこういった魔方陣を描く」

そういつと神は俺の額に手を当てる。それと同時に

神が言ったそれが脳裏にはっきりと浮かび上がる。

「なんだよこれ」

「まあーこれでこの式は忘れることはないだろう後

この魔方陣を書いた後両手をその中心に乗せ『開門』っと叫ぶんだ
そうすれば異世界のあらゆる場所につながる。そしてお前が

望んだ形、属性、強さ、能力、それぞれに当てはまる魔物をその
場に召喚することが

できる。その魔物が気に入れば名前をつけることによってその召
喚獣を

名前を呼ぶだけで魔方陣無しで召喚できるようになる。それを永
久契約という。

そしてもう一つ、名前をつけずその場しのぎの召喚の事を一次契
約と呼ぶ。

まあーだいたい説明したし、早速異世界へ行ってもらおうか。ザ
ビエルくん

彼を異次元転移させてあげて」
「OK！BOSS」

ザビエルがさういふと突然凄まじい速さで手のひらを動かし印を
結ぶ。

次の瞬間俺の足もとが紫色の光を放ち、俺は無数の光の行き交う
空間へ

飲み込まれた。そしてそれから数分後、俺は白い建物の中に立っ
ていた。

1話：白い空間

真っ白な空間、俺はそんな空間の中、呆然と一つの彫刻を眺めていた。

眺めていた……そう俺は眺めているのだ。

女神のような女の石像を……

というよりも、この空間の出口が見つからないからそれぐらいしか暇を持て余す

手段がないのだ。娯楽は必要だけどさすがに彫刻だけ眺めてるのも辛い。

「飽きた……てかゼビエルのやつよくも俺をこんなわけわからんところに送ってくれたな

普通異世界物の小説だと召喚されましたとか平原にいたつとか
まあー

こんな密閉空間とかじゃないだろ。てか、何、神様は俺に何を求めているんだ？

ほんと意味分かんないわ」

まあーそれはさて置き……これからどうする？

一度、芸術の教科書である考える人の象の格好になって考える。

椅子がないから空気椅子でそれを実行……失敗。

「アホか！ どうやって考える人の格好で空気椅子やれってんだよ
普通に考えて

両足付けないからさ、無理に決まってるじゃん」

と、まあー自分に突っ込んだあとで、体育座りで白いるの地面に座り込み考える。

正攻法を考えるが、映画や漫画などで見たり読んだりした脱獄の基本的な奴を試す。

が……失敗、当然ちゃー当然だよ。俺には武器も何も掘る道具がないんだから。

俺は少し削れた爪を眺めながら再び考える。

「が、何も思い浮かばない。てか、道具もなしにこんな場所出れる訳がない。」

「とりあえず、アレやってみるか」

俺は地面に膝まずき、そのまま地面に神様に教えられたアレを実行する。

「が……思わぬことにいきあたった。」

「おーい、神様やあーこれってペンとか筆とか書くもんがいるんじゃないんですか？」

「つて、ボケエー！ どうやって書くもん用意すりゃーいいんだあ！ 血でも使って書けつてのが、あんやるおー！」

数分後……

「ふうーやつべ、ちよつと血流しすぎたか？ なんだか体に寒気を感じるんだが」

「ああ……よしやるぞー！」

しかし俺はそのままフリーズ、丸く円に描かれた赤色の魔方陣の中央に俺自身がダイブ

べつとりと体に自分の血液がついて、スタンガンでもくらったみたいに

体が動かなくなった。

「ああ……力はいんねえ……もう無理、もしかして俺ってこのままお陀仏になるわけ？」

「いやいや、せつかく神様に命生き返らせてもらったのにこのまま誰にも見届けられずに」

「さようなら、ってないだろ！ いや俺の死にはふさわしいけどもさ、でも」

「生き返ってすぐにお陀仏なんてヒデーはなしだわ、ああーあの神様の糞爺と」

ザビハゲのヤローこのまま死んだらもつかいそつちいつてやんからなあー！ その時は

必ず……て、アレ……なんか俺の視界の先に中世ヨーロッパにいらそうな

女の人が写ったぞ？ ああーこれはあの彫刻の女神様が、そうか、俺マジで死ぬのな、

俺を迎えに来たって腹だろ？ 俺が心のなかでそうつぶやくと目の前に映り込む

桃色の髪の少女が頷き、壁の方向を見てこ声を上げた。

「アイシャ、人が神殿で倒れてるの、貴方も来てこの人を持ち上げるの手伝って」

「え？ 姫さま？ 今なんと？」

「だあーかあーらあー『人』が倒れてるの！」

「え！ ちょ、姫さま、ここは神聖なデイガル神殿ですよ？」

しかもここは清めの揺りかご、許可あるものしか入ることの許されない場所に

どうして人が？」

「知らないよ、知らないけど、いっぱい血が出てるのよ」

あれ、何だ……なんだか妙に話す女神様だなあーまあーいつかどうせ俺はこのまま……

「エエー！ 姫さま、ちょっと待って下さい。本当に人が……しかも男の人が

ハア……なんだかめまいが……」

バタン……何が倒れる音が耳に入り、視界に映る少女が額に手を当て

嘆息を漏らす。

「アイシャ……もあー使えない人ね、あなたはここで寝てなさい。

この方は私がお医者様のところへ連れてまいります」

同時に俺の体は少女の肩に触れ、同時に俺は意識を失った。

1話：白い空間（後書き）

深夜に書いたので少なめですが明日も出来れば更新します。
1500字くらいかな？ 多くて2500文字程度で書いていきます。

小説つと言うよりも気持ちを直接文章に書いてる思い書きみたいになってるけど。よろしければ次回もご意見ください。

2話：牢獄の中

俺の意識は眠りから浮上し、俺はゆっくりと目を見開いた。同時に景色が視界に写り込んでくる。

薄暗くて、よくわからないが、鉄格子と無数に天井にかかる蜘蛛の巣は目に捉えることができた。

しかし、どうして俺はこんな場所にいるんだ？ 確か俺は……俺は頭を巡らせ、うつすらとボケていた記憶を蘇らせる。

「ああーあん時俺、女神見て……アレ？ なんで俺生きてんだ？ うーん」

しばし考える、頭に手を当てて考える。

同時に視界に白い包帯が写り込んだ。

しかしそれに全く見覚えがない。

俺はそれを何度か眺めていると、あの時見えた女神の事を思い出す。

主に会話の方を、俺はあの時死神みたいな、感じて女神が迎えに来たんだと思ってたけど

あれはもしかして……生きた人間だったのか？ だとすればあの部屋に隠し扉みたいな

感じの物があったわけで、俺はそれを見つけれず自分で自分の命を縮めてたわけで……

「ハア……」

俺はあの時必死に脱出しようとした。それも死ぬ思い出。

まあー実際死にかけたけど……まあーともあれ、俺は助かったわけだ。

俺は軽く其場に立ち上がりノソノソと固いベットの上から降り、そのまま鉄格子の向こうを

眺めた。鉄格子の向こうには階段が伸びており、看守らしき人はおろか、人の気一つない。

てか、どうして俺はこんな場所に入れられてるんだ？　もしかして不法侵入とかで

しょっぴかれた？　ってことは……いや、ありえるぞ。よくよく思い返して見れば

俺の視界に写り込んだ女神おんなともう一人の女、そいつらが何やら話してたしな。

確か、ここは神殿とか、神聖な場所とかなんとか、神殿で言えば神様を崇めているんだろうし

しかも俺が男だつと知って一人は何やら変な音を立てて地面に倒れて気絶してたような……

まあーとにかく、俺の印象は恐ろしいほど悪いわけだ。

「さて、これからどうする？　おとなしくここで待ってお咎め受けて数日？　数年？

ここで一人牢獄暮らし」

……却下！　なんで俺がお咎めを受けにやーならんだ！　俺は言わば被害者

ザビエールと白髪ジギーにこの世界に送られて、あんな意味のわからない場所に

放置して、俺は悪くないぞ！　絶対に……

「ダァー！　俺をここから出してくれ！　俺はわるくないんだよ」
沈黙、虚しく自分の放った声が跳ね返り耳に入る。

それ以外の声は全くしない。

どうやらここには本当に自分だけが投獄されているようだ。

俺はその場に座り込み、腕組みをしながら嘆息を漏らした。

「ハァー」

お手上げだった、鉄格子はサビもせず銀の光沢を放ち、壁は厚くとても手で掘って脱獄、みたいな行動には出れない。

更に言えばあの時魔方阵を書くとき使った血の量があまりに多く、今体がだるくて

仕方がない。俺はもともと運動神経がいいわけでも体力があるわ

けでもない。

正直一般人以下の身体能力をしていると俺は自負している。

再び俺は三度目のため息をついた。

「はぁ……」

ため息と共に俺はそのまま冷たい地面に寝そべり再び眠りについた。

3話：牢獄の中（2）

アレからどれぐらいの時間が立ったのだろ……

俺は体の節々を動かして、体の具合を確かめるようにその場から立ち上がり運動をする。

数分その行動を繰り返していると、鉄格子の向こう側から扉を開くようなそんな音が聞こえた。

俺はすかさず鉄格子にしがみつき、来客者の来る方角を眺めた。数分後、来客者は俺の前に現れた。

髪は桃色、長い髪に白銀の瞳、背丈は165〜168くらい？

かな

表情や仕草、それらを見て、彼女が俺と同じ歳もしくは、俺より年上のお姉さん？

に見える。服装は白色のローブを纏い杖のような物を手に持っている。

彼女の左右には活発そうな腰にナイフを所持した青髪の女と

きよるきよる、とこちらを見て何度も目をそらす、挙動不審な橙色の若い女が

立っている。俺はそれらの人たちを眺め細目で眺めフリーズする。

正直なところ、俺は女子にとことん弱い、てか苦手だ。

世で言うリア充には分類されない草食系男子。昔から告白される側で

告白する側ではない。しかも告白されると、すぐにその場から逃亡、

正直高校生になった今でも余裕で逃げるし現実逃避する。

もちろん女がとことん嫌いってわけじゃない。ただ、苦手なのだ。

俺がフリーズしていると、中央に立っている桃色の髪をした女が声を上げた。

「体調はどうですか？」

「あ……えっと、多分大丈夫……だと思う」

それに彼女は頷き、女神のような優しい微笑みを漏らすと、続けて声を上げる。

「それは良かった。あの時はびっくりしちゃいました。だって人があんな場所に

倒れているんだもの、しかも男の方が」

「まあ……いろいろありまして」

「そうなんですか。いろいろ、そうですねーいろいろないとあんな場所

男の方が踏み入れるわけありませんもの」

俺はそれに頷き、彼女たちから視線をそらす。

これ以上彼女たちの顔を見ていると、完全に意識が飛びそうだったからだ。

こみ上げる心臓からの鼓動を抑え、俺は息を整える。

「姫さま、このようなどこの馬の骨ともわからぬ存在に姫さまの高貴なお言葉を

交わす必要はありません。それに尋問ならば、我々だけで十分、

そうですね？」

アイシヤ」

左側から声が上がると右側の方から声をが漏れる。

「え？ えっと……多分大丈夫……」

「多分ってねえーあんだ……もう少しはつきりモノを言えないの？」

「えっと……えっと……大丈夫だと思います……」

「もうイイわ、とにかく姫さまはお部屋に戻ってください。朝の祈りの義に

姫さまがおいでになられなかったら我々下々の者が不安をいただきます。

俺は声の行き交う鉄格子の向こうに恐る恐る目をやる。

すると、視界の片隅にうなだれる姫と呼ばれる女の顔が映り込む。

同時にハブてるように頬をふくらませ、杖をブンブンと青髪の女に向けて

振ります。青髪の女はそれをいともたやすく避け、回避する。

しばらくの後、彼女の手握られた杖は青髪の女にしっかりと掴まれ

動きを止めた。

「姫さま、お戯れはこれぐらいにして、姫さまは祈りの場に向かってください」

「はぁーはぁーはぁーわかったわよ……今日は私の負け、おとなしく引き下がるわ」

そう言って、白色のローブを纏った女は階段の影へ姿を消した

4話：牢獄の中（3）

青髪で短髪の女が声を上げる。

「さて、これよりお前の尋問を開始する。内容は大きく分けて2つだ
まずはじめに、どうやってここへ侵入した？ 第二にあの魔方陣
はなんだ？

見たことの無い式をしていたぞ？ それらを詳しく説明するんだ」
命令口調の女、正直こういった女には俺は緊張も何もしない。

女の気のあるやつよりも男気のある女のほうが話しやすい。

しかし、それでも女には変わりないから首元を見て話す。

「俺ってさ、眠ると夢遊病の症状が出るんだよね。それも走ってそ
れを実行するらしいから

多分それで誰にも気づかれずあんな場所まで迷い込んだんだと思
う。

それにあの魔方陣も多分俺が無茶苦茶に書いた適当な魔方陣だから
気にしないで、俺ってバカだからさ、魔方陣書くとき多分書くも
のがない

ってことで血でそれを書いたんだと思うんだよね」

正直なところこんないいわけで、この人達を納得できるとは考え
ていない。

しかし、突然神様に命を生き返らされてそのままあの場所に立っ
ていた、

なんてことを話しても絶対に信じてもらえないだろう。だから
とっさに口から嘘を吐いた。

同時に青髪の女が首をかしげる。

「すまないが、夢遊病とはなんだ？ 何かの病気のことなのか？」

「ああ、知らないの？ そっか・・・えっと簡単に言えば寝てる時に
意識もしてないのにフラフラ立ち歩くことだよ。朝起きるとベッ

トで寝てたはずなのに

街の中で眠ってたり、家の隅で眠ってたりと、まあいろいろな場所
所で目を覚ます

病気だよ」

「ああーそれって私一度経験あるよ？ でもあの……えっと……ホ
ント小さな頃の事だけだ」

「夢遊病ね……夢遊病の意味は分かった。だがどうやってこの神殿
に入り込んだ？

いくら夢遊病で出歩いたとしても、王国騎士団の検問や巨大な門
がその進行を

阻むだろう。しかし不審者の報告はおろか騒動すらない。お前は
まるで

そこに湧いて出てきたようにあの場所に現れた。私はそれが納得
できない」

「それが一番夢遊病の悪いところだよ、動いてる本人には意識が
ないんだから

どうやってここへ来たのかわからないんだ。正直今ここがどこな
のかもわからないんだよ

俺にはさ」

「ここがどこだかわからない？ だと……我々の服装を見てもそれ
がわからないとは

お前はよほど辺鄙な場所から来たのだな？ それにその黒色の服、
このあたりでは

目にしない素材をつかっているようだ。お前は一体何者でどこか
らやってきた？」

「そうそう、君のいったとおり、俺はかなり遠くからここへ来たん
だよな。

ちょうど昨日の夜この街について起きたらここでさあーびづく
りだよほんと」

「……遠くから？ どのあたりからだ？ アラードール？それとも
ミレファストル王国？

「はたまた、ロガール帝国の避難民か？」

彼女の口から漏れる国名は一切知らない。

「えっと、それ、俺はロガール帝国の避難民だよ。生活が苦しくて親も兄弟も親戚だっていないから、俺は一人であの国をでたのさ」
あの国ってどこの国？　と自分の付いた嘘に言いたくなるがそれを止める。

「そうか、ロガール帝国の避難民か……あの戦はひどいものだったからな

多くの兵士が死に、多くの民が死んだ。私の兄もあの戦争で……」
彼女はどこか悲しげな表情を浮かべ、地面を眺めると、

「分かった。お前の言葉を信じよう。しかしもうしばらくこの牢獄にいてもらうことになる

もともとお前が悪い人物でないなら開放する予定だったしな」

「それならさあー今から開放してもなんの問題もないんじゃない？
俺は早くこんな意味のわからない場所から逃げ出したかった。

どうせ、ここは前の会話からして女ばかりに違いないからな、さっさとこの場から

離れて、悠々自適に旅して日記つけて、うまいもん食べて、昼寝してまた

歩いて、まあーそんな感じで旅がしたいな、異世界なんだし。

「すまないが、今は無理だ、今この宮殿には王族や貴族の皆様方が多く来客している。そこにお前のような怪しい者を出歩かせるわけにはいかないのだ

もしかすると、貴族たち、もしくは王族の機嫌を損ねて永遠に牢獄ぐらしにされるやも

しれないし、今は静かに時を待て」

「静かに時を待ってって、どれくらい？」

「そうだな……」

そこで青髪の女に黙ったまま佇んでいた女が声を上げる。

「えっと、それは……夕日の傾いた頃ですね。姫さまがそう言って

ました」

「そうだ、アイシャの言うとおり、後10時間後の夕暮れ時がちょうどいいだろう」

「そっか……まあー無期懲役とかなったら俺の人生終わりだしおとなしく

ここにいろよ」

「そうだな、それがいい」

頷きながら彼女がそう言うのと、俺は頭を描きながら申し訳なさそうにお願いごとを

二人に言う。

「あのさあ……もし良かったら書くものと紙をもらえないかな？

後10時間近くここにいろわけだし暇で死んじゃうかもしれないからさ」

青髪の女は微笑を浮かべると頷き答える。

「わかった。食べ物運んだとき、一緒に紙とペンを届けよう」

「ありがとう」

「では私はこれからお前の報告と祈りの義に参加してくる。

くれぐれもおとなしくしているよ？」

「へーい」

そう言うのと、二人は階段を登り姿が見えなくなった。

「なんだ、結構いい人そうだな、あの人、まあーどうでもいいや

どうせ、これっきりの縁だしさ」

俺は鉄格子から離れ、硬いベットに寝そべると再び目を深く閉じた。

5話：宮殿の外

「そういえば、お前の名前をなんて言うんだ？」

青髪の女の隣を歩きながら俺は道に佇む女たちの視線を受け、ソワソワしながら宮殿の入り口を目指していた。

「そういえば俺、あんたらに名前言ってなかったよな。俺の名前は……」

俺は歩きながら左右を歩く二人の女に声を上げた。

「そうですね、アメリヤシオウ雨宮紫央か、何やら変わった名前だが

シオウと呼べばいいのか？」

俺はそれに頷きながら答える。

「まあーそうだね。呼び方はそれでいいよ」

「分かった。シオウも名を名乗ったのだから我々も名前を名乗ろう。

私はリース・ルア・フローラだ、お前の隣にいるのはロイズ・クリ・アリシャという

一心、彼女は火の属の召喚を行うことのできる、世界に数人といない召喚士の一人だ

まあーまだまだ半人前だから、こうして神殿で精神的にも召喚士としても成長すべく

修練を重ねているのだがな。そんな召喚士たちを守るのが私を含める盾シヤルダの役割だ」

召喚士？ まあー異世界の話だし、魔法使いとか剣士とか中世とかまあー色々あるだろうけど

なんでよりもよって召喚士がいる世界にあの神様は俺を送ったんだ？ まあーまだ召喚とか

やったことないけど、召喚士がいるなら俺みたいな召喚士いらないじゃん。マジで……

でもまあ……この世界では少ないらしいから、それでよしよしよ……うん、そうしよう。

俺は足を進めながらそう考えつつ、俺は言葉を返す。

「その盾シャルダだっけ？ それって召喚士には必ずそういった存在がいるわけ？」

「ああ、召喚士には必ず守り役の人間が数人つくことになっている。もちろん召喚士はそれを指名することができる。それが上位騎士の人間であろうと

上級魔導師であろうと、誘うことができる。もちろん誘われた人間は

拒否することもできるが、大体の人間は召喚士の誘いを受けるのよ。

それは国から報奨される報酬が膨大なことが大きな理由、もちろん報酬のためだけに盾になるモノもいるが、多くは召喚士の盾として働けることを

誇りとしている者が多い、まあー召喚士自体が少ないから憧れるモノが多いのも

その理由だな」

「へえー」

かなり高収入な仕事なわけね……まあー俺には関係ないか……

「なんだ、興味あるのか？ だが、見る限りお前ではその任に当たるほどの実力は

ないと見える。諦めるんだな」

「……別に俺は盾になるきないし、そもそも俺はここを出たら悠々自適の一人旅する予定だ

そんな危険と隣り合わせの仕事俺はこれから目指したりなろうと思わないよ」

フローラは僅かに笑うとさらに足を走らせた。

俺もそれについていくようにして足を走らせる。

数分後……

2つの大きな門、左右に二人の黒いフードを着た女。

俺はそんな門を眺めながら立っていた。

この門を超えるとどうやら、外街らしい。

俺は後ろで佇む青髪の女に向けて振り返り声を上げる。

「ありがとな、いろいろ、んじゃー俺はこれで失礼するよ。」

あの姫さんにもよろしく言っといてくれ」

「分かった。何も言わないでおこう」

「え……」

俺は頭を描きながら少女を眺め嘆息する。

「そうですか……まあーいいや、どうせこれきりだしさ」

「その通りだ、もう、『夢遊病』とかを理由にこんな場所まで迷い込んでくるんじゃないぞ？」

シオウ」

俺はそれに頬を描きながら答える。

「まあーうん、そうするよ」

正直夢遊病なんて小学校以来起こったことない。あん時はとっさにあんな嘘をついたけど

この人達には悪いことをしたかな？ まあーいつか……どうせこれつきりだ。

「では、開いてくれ」

彼女がそう言つと、門の左右に立っていた女が扉の橋に付けられたレバーを引き

同時に音を立てて扉は全開になった。

そのまま門の外に出ると、扉の後ろにいる彼女らが扉の閉じる音と共に見えなくなった。

俺はそのまま背後に映り込む街並みを眺めながら急斜面担っている道を進む。

「さて、これからどうするか、まあーもちろん一人旅だが、何を目的に旅をする？」

あのジジーは世界を救えとか言ってたけど正直、その世界を救う基準がわからん

まあーいいや、そんなこと後で考えて今日はもう暗いし、どっか

で野宿だな」

俺の視界にはすでに星空が移り、下には街の光が見えていた。目指すはもちろん街であり、俺はそのまま石畳の急斜面を進んだ。

宮殿から出て数分……

背後から爆音と何かが崩れる音が聞こえた。

俺は思わず振り返り、そのばを黙視する。

「おいおい……なんだよアレ……」

先ほどまで見えていた宮殿の門の先から赤色の火が上がり、

巨大な、何かが宮殿の建物を破壊してる。

同時に宮殿の方角から鐘の音が聞こえ、再び爆音、何がなんだからわからないまま俺はそれに背を向ける。

俺に何ができる？ あの時も俺が無茶やって俺自身が死んじゃったんだろぅが……

「クソ、俺のバカ、どうして俺はこうも……」

胸の奥が熱くなって、足が勝手に宮殿の方に向かっていった。

近づくに連れ、振動と建物が焼ける匂いが漂ってくる。

そして……門の前に立ち必死に門を叩く。

しかし、誰もいないのか、扉は開かない。

「クソ……」

俺には何も力がなくて、役に立たなくって、どうせ俺が今この先に行ったって

何もできないだろう。それはわかってる。だけど俺の正義、が俺の心が

この先へ行って何かをしろっと叫んでいる。

俺は胸を片手で抑え、強く握りしめた。

そこで、軽い何かが落ちる音が耳に入る。

俺はそれに目を思わず向けた。

「筆……」

それは筆だった、昼に持ってきてもらった絵筆。

「今、あれを試すべきだ。どうなるかなんてわからない。

でも今あいつにもらった力を使わないといつ使う……今使うしか

……」

俺は手に筆を取り、インクの入った容器を取り出しそれにつける。

そして、楕円を描き魔方陣を素早く描いていく。

同時に両手を描いた魔方陣に乗せ、構想を浮かべる。

龍だ、龍でいい。今この壁を超え、あのよくわからん生物を駆逐できるほどの力が

欲しい、だから。龍だ。それもただの龍ではない。世界で最も偉

大で最も強い

飛龍をここへ。

「開門……!!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3070w/>

気まぐれ勇者の召喚士

2011年10月31日23時46分発行